

# 高山

たかやま  
高山の原生林を守る会

会報 第 88 号

2014年4月



## 第 132 回 高湯～不動沢登山道周辺自然林雪上観察会に参加して 佐藤 和重

2014年度最初の観察会は、僕は無積雪期には何度か歩いたことがあるが積雪期には初めてのコース、気温は低いが晴天、幸先は良さそう。

参加者は4名と僕が参加した観察会では最少人数で少しさみしいが、2週連続の大雪と冬場ということを考えれば致し方ない所かもし



このコース最大のブナ



樹皮に残されたクマの足跡



登山道から離れて自然林へ

れない。

車を高湯温泉の白樺荘付近のツキ止まりに駐車し、スノーシュー2名、山スキー2名という構成で、登山道をはずれ積雪期ならではの観察会の始まり。

しばらくは、植林されたヒノキなどの少し薄暗い針葉樹帯の登りを、山スキー隊の後ろをスノーシューでも膝まで沈みながらラッセル状態で進む。

急な登りを越えたあたりから、今回の観察会のポイントのひとつ、そんなに幹が大きいミズナラ、クリ林に林層が変わる。

守さんの話では、「この辺は吾妻山系でも地質的には最も古い地質にもかかわらず大木が少ないということは、何度も伐採を繰り返されてきた証拠」

以前は高湯温泉の人々の生活のエネルギー源(蒔など)だったのかもしれない。またここでは、着氷という珍しい自然が創った造形を目にすることができました。ミズナラの幹のふもとに雪がリング状の輪になっているのです、皆思い思いに写真撮影。

不動沢より少し上の地点に到着、そこで雪のテーブルを作り、昼食タイム。そして、昼食後はもう一つの目的である雪層断面の雪質の観察。これは、気温の変化や経過時間による積雪した雪質の変化を知ることができ、それにより表層雪崩を予測できるという観察。

メンバー代わる代わるの作業でやっと地面が見え、雪の層を測ったところ約2mありました。雪質の変化が見れたのは7か所、そのうち1番大きかったのが地上から1m40cmあたりで、そこが滑り表層雪崩を引き起こすということを解説していただき、この時期ならではの自然観察会でした。

樹木の冬芽は、ヤマモミジ、リョウブ、サラサドウダン、ホウノキ、ウリハダカエデ、ケヤマハンノキなどの冬芽を観察することができました。



夫婦のようなミズナラ  
付いては離れの跡が数か所



センシゴケ  
針で刺したような穴が特徴



高湯温泉郷

(この上部の自然林を伐採して放射能除染土の仮置き場にするという)



ケヤマハンノキの冬芽



着氷



この一帯に広がる2次林  
(ミズナラークリ林)



雪の結晶は上空でなくでもできる



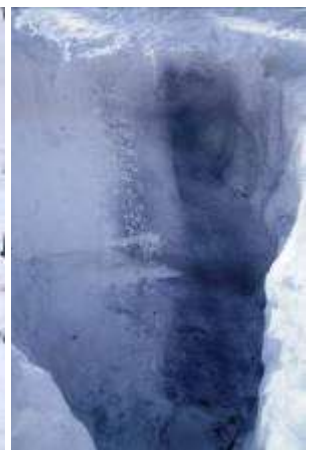
雪の断面掘りは交代しながら



昼食タイム



積雪は2m近く



弱層がくっきり

タラヨウという木を初めて見たのは、今から10年前の2003年の11月に小石川植物園を訪れたときです。それまで、タラヨウという木があることさえ知らなかったのですが、その時点から、私の目にはタラヨウが見えるようになったらしいです。というのは、小石川植物園から福島に戻った翌日、自転車で福島東郵便局のそばを通りかかったとき、そこにタラヨウの木があることに気づいたからです。それは、郵便局の敷地に「ハガキの木」として植栽されたものでした。それまで全然気にならなかったのに、タラヨウの木を知ったとたん、見えてくるなんて！うふふと笑いながら、葉っぱと赤い実を少しいただいて帰りました。そして、その赤い実を、試しに庭にばらまきました。ひょっとして芽が出たら面白いなと思ったからです。でも、タラヨウの発芽した形跡は見られませんでした。暖かい地方の樹木だから、ここ福島では無理なのだなと、あっさり納得したのです。

そんなことがあって、何年かたったころ、「木の種類によって、赤い実のまま地上に落ちてても発芽しないものがある。」と、本に書いてあるのを見つけました。「発芽阻害物質」というものでコーティングされているので、鳥に食べられないと発芽しないというのです。ええっ、タネにそんな仕掛けがあるの！？…そうか、タラヨウはそのタイプだったのかもしれないな。だから発芽しなかったのかも！とすれば、皮をむけば発芽するってことだ。そう思ったらすぐに試したくなる性分。早速、タラヨウの果実の赤い皮を取り除き、タネだけを鉢に埋め込みました。が、いつしか、そんな試しをしていることを、忘れてしまいました。

そして今、2013年の12月中旬、東郵便局のタラヨウの木に、赤い実がいっぱいついているのを目にして、ハッと思い出したのです。庭の鉢の芽生え、あれは、あのときのタラヨウかもしれないッ！何の木の子生えなのか、見当がつかなくて、秋ごろからずっと気になっていたのがあったのです(写真①)。そのときは、自分が、皮をむいて鉢に埋めたタラヨウが発芽したものかもしれない、などと思出しもしませんでした。なのに、今、タラヨウの赤い実を見たら、皮をむいてタネを埋め込んだ記憶が一挙によみがえってくるとは…。急いで家に帰り、鉢を持ち上げて、小さな葉っぱを見てみました。本当にタラヨウなのかな？この葉には鋸歯があるけど、タラヨウの葉に鋸歯があったっけ？字を書いてみれば分かるかも…。小枝で葉っぱの裏にタラヨウの「タ」の一文字を書いてみました。すると、まもなく、文字が黒ずんできました。小さくてもタラヨウの葉っぱに違いありません！それにしても、いつ、タラヨウのタネを鉢に埋め込んだのだけ？震災前かな、震災後はそんな試しをやる余裕はなかったはずだから…。もしかすると、この4本のタラヨウは、発芽してからすでに3年は経っているのかもしれない！



① 秋ごろから、鉢の中の芽生えが気になっていたのです…。



②この赤い実が、本当に発芽阻害物質でコーティングされているのかしら！？

タラヨウのタネを鉢に埋め込んだのが何年の何月だったか、記憶も記録もないことにあ然としましたが、それ以上に、私は、ちょっと試した皮むきタネが発芽し、原発事故後は放つたらかしの庭で、しかも小さな鉢の中で、生きてきた幼木の強さに感動しました。果たして、タラヨウが発芽阻害の特性を持つ種子だったのか。なぞは残りますが、タネを蒔いた主の《忘却》を呼び覚ましたのが、親木の赤い果実(写真②)だったことに、いくぶん救われた思いがします。(2013.12.19)

2011年3月11日の東日本大震災から3年の年月が過ぎました。私の住む新地町でも人々は「あれから3年」と言って、それぞれの震災後の生活を振り返っています。先日3月16日(日)に地区の総会がありました。この地区に災害公営住宅が建ち、新たに22戸が編入になりました。区長さんから「ようやく仮設住宅から出て、この地区の新たな住人となりました。地区住民一同喜んでお迎えいたします。新しい住宅で快適な生活をなさってください」とお話がありました。その後、自己紹介がありました。7、8名の方が来られていました。多くは50才台くらいの女性でした。「大戸浜(おおどはま)からきました〇〇です」「釣師浜(つるしはま)の〇〇です」とおっしゃっていました。大戸浜地区も釣師浜地区もあの津波で跡形もなく消え去りました。家を失っただけでなく、家族を亡くされているかもしれないと思いました。言葉の中に出自である大戸浜や釣師浜の土地名があることに、私は感慨を深くしました。どちらの地区も津波被害のあった危険地域ということで人の住む家は建てられないことになりました。夏は海水浴客で賑わい、民宿や旅館からは魚を焼くにおいがしました。漁師を生業とする方も多く、地区としてのまとまりも強固だったように思います。今は、釣師防災緑地としての計画が進んでいるようです。あの町並みや賑わいはもう戻ることはありません。潮の香りのする地区に数十年を過ごし、愛着ある土地やその名前がなくなるのは大変な喪失感であろうと思われました。知っている方はいませんでしたし、顔の表情からは読み取れませんでした、心の傷は今も癒えないであろうと思いました。

総会では新地町の現状をいろいろ聞くことができました。高台への防災集団移転促進事業が進み、町内7カ所に造成している中で、6カ所に家が建ち始め、復興が目に見えてきたこと。この3月には総合病院が開院し、診療科目が15科目、病床数が140床もあり、救急医療体制も整っていて、町民がより安全安心な生活ができるようになったこと。その他に、特別養護老人ホームが新たに4月から開所し、介護需要に対応できるようになったことなども聞きました。新地町は超高齢化社会だそうです。総人口に占める65歳以上の人口割合が21%以上になると超高齢化と呼ばれ、新地町は28.6%にもなるというのです。人口は8000人を切りました。震災前の2月には8400人いましたから、400人ほど減少したわけです。毎月の「広報新地」を見ると、誕生する子供の人数より、亡くなるお年寄りの人数が断然多いです。税収が減ってきているので、企業を誘致し、働く場の確保をしていかなければならないということでした。私が65歳になる頃は、もっと高齢化社会になっていることでしょう。若い方がいなければ、お世話になることは出来ません。毎日、鹿狼山に登って健康や体力を維持し、ボケないように頭を使い、いつまでも自分のことは自分でできるようにしたいものだと思います。

総会の帰り道、隣組の奥さんに誘われて災害公営住宅を見て回りました。緩やかな坂道を挟んで3階建ての建物が4棟ありました。エレベーターはないそうです。駐車場スペースも広くあり、各戸にプレハブ物置が設置されていました。小さいけれど集会所もありました。収入に応じて家賃を支払うそうです。ベランダで洗濯物を取り込んでいる人がいました。すでに新しい生活が始まっているのです。

ここからは青い海も見えました。津波で防波堤がなくなってからは、本当に海が近くなりました。高い防波堤があったときは海が見えませんでした。人は防波堤のすぐ側で何の疑問も危険も感じないで生活していました。しかし、人が作ったものには限界があり、いつしかそれを超えるような自然の猛威がやってくるのだと思います。

今度出来る防災緑地とは、津波から人、町を守るための大きな森だということです。クロマツや広葉樹を合わせて10万本の苗木が必要なので、その一部として、町に自生している樹木の種から苗木を育てて現地に植栽をしたいと書いてありました。青写真には海側に大きな森があり、その後ろには子供達の広場やみんなの広場がありました。またその後ろには県道(嵩上げ道路)があって、町を二重に守るようになっていました。

また、これから大津波が町を襲ってくる時がないとも限りません。でも、沿岸部に人は住まないで3年前のようなことにはならないでしょう。また、豊かな森は豊かな海を作るともいいます。海が見えなくなるような巨大で高い堤防でなく、自然豊かな町のままでいようとする考えが良いと思いました。

町から海を眺める時に大きな森を見るようになる、その日が来るのは後何年後になるのでしょうか。何年、何十年とかかるかもしれませんが、未来ある子供達により安心・安全な環境を残したいものです。(2014/03/23)



完成した災害公営住宅



沿岸部に防災緑地が完成するのは何時の日か  
(鹿狼山から沿岸部を見る)

(高山・吾妻スキー場建設問題を考える「東北の自然」第48号、1988年11月臨時増刊号より再録)

「高山登山口の鳥子平に、もうせん苔の群落がある」という知人の話に心ひかれた。初秋のころは苔に誘われたトンボの死骸が一面に湿原を蔽うのだという。数年前の初秋、念願の鳥子平湿原を訪ねたことがある。浄土平からスカイラインを南下し、吾妻小富士の南側の兔平から山道に分け入った。

薄暗い樹林の中を約30分も歩いたころ林がきれ、熊笹の繁みの向こうに鳥子平が開けていた。真先に黒い台形の高山が目に入る。針葉樹の衣をまとった高山は、明るい湿原と際立った対照をみせ、まるで非日常の世界のようだった。然し、湿原にトンボの骸



は無く、もうせん苔も点在するだけ。池塘の上を一匹のアカカネが飛んでいた。一瞬の後、苔とトンボの図式の変化はスカイラインの排ガスの影響か、酸性雨のせいなのかとなど考えてみた。しかし、駆けだしの自然保護協会の私には分かる筈もない。謎を抱え下山してきた。

現在、この高山の自然が破壊の危機にさらされようとしている。62年3月、吉田福島市長は市議会席上で「高山に国際級スキー場を開発し、市の経済活性化をはかる」旨を言明したからである。これに対し「開発による原生林伐採は水資源の破壊と河川の氾濫、固有の動植物の絶滅につながる」と反論する高山の原生林を守る会が二か月後に設立された。その賛同者として私は準備段階から係ることになった。

なぜ一主婦が自然保護なのかと問われたら「自然ほど人間に対し無限の教訓と恩恵を与えるものはない」と答えようと思っている。ひとつの例をあげれば、主婦にとり密接な生活用水の問題がある。「日本人は平和と水はタダだと思っている」というベンダサン警告を無視する訳にはいかない。「守る会」の調査によれば、荒川の水源である高山を破壊すると水不足は必至という結論がでてい。大水害の頻度も増すだろう。これらの弊害は市税の大濫費につながっていく。目先だけの開発計画に対し、私は深く懸念している。



小林滯子さん（中央前列左から3人目）  
(2000.6.4 中吾妻ブナの新緑観察会)

#### 小林滯子さんを偲ぶ

高山の原生林を守る会創立幹事であった小林滯子さんが2014年2月22日に亡くなりました(享年86歳)。高山スキー場反対運動のさなか、私も会報を届けるため、何度かお宅にお伺いした事があります。その度に、おいしいお菓子とお茶を用意していただき、自然保護から身の回りの話題まで楽しくお話をさせていただきました。また、文学の造詣が深く、著書「歴訪の作家たち」では保原町出身の作家・小林美代子の生涯を暖かいまなざしで紹介している姿勢に深く感動を覚えた記憶があります。高山の原生林を守る会を通じて知り合った方々の中で、私が最も尊敬していた一人でした。それだけに今回の訃報に、心の大きな支えを失った強い失望感にとらわれております。

なお、2014年2月26日のお通夜には、佐藤と奥田が参列しました。心よりご冥福をお祈りいたします。

(佐藤 守 記)

## 東北ブナ紀行(53)

奥田 博

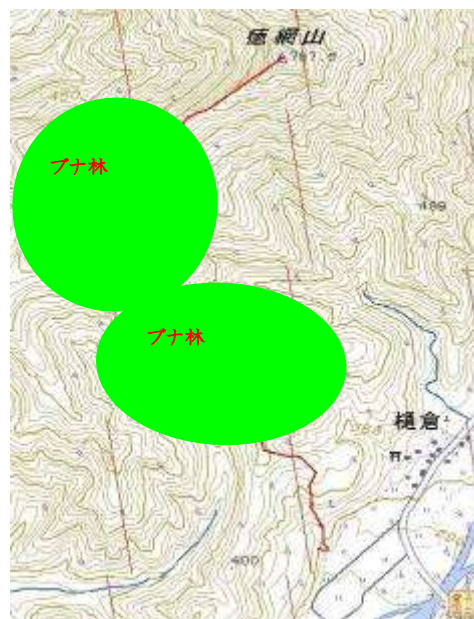
東北の山に残されたわずかな面積のブナの森。そのわずかなブナの森を訪ねて歩く。そして期待通りの森に合えることは嬉しいが、期待しない山で出合ったブナの森は、殊更喜ばしい。そして森で過ごすのは至福の時間だ。今回は、期待しないで登った山で出合ったブナの森の紹介を！

### 85) 徳網山 788m

朝日連峰の南端、祝瓶山の西側にそびえる788mの徳網山。祝瓶山に向かう途中の森も素晴らしいが、この山のブナは第一級なのだ。登山口から30分も登れば、見事なブナ林に囲まれる。この森が、山頂直下まで続く。

入口には小さな目立たない標柱が建っているが、見逃してしまいそうだ。登山口の看板を見て、杉の人工林に入ってゆく。これを抜けると、雑木の二次林だ。さらに登ると、明瞭な尾根に出て北へと方向を変える。すると見事なブナが現れる。ブナの間に道があって、ブナ街道といったところだ。深い雪に枝や幹が変形したブナが多く見られる。ここは新潟県境に近い豪雪地帯であることがうかがわせる。気に入ったブナを見つけて、ザックを降ろしてコーヒーを飲む。至福のひと時だ。

道は直角に西に向かうと、山頂が顔を出す。そんなに展望の尾根ではないが、東側は崖になった立派な山容だ。尾根を上部に上り詰めると、ブナはさらに立派になって、見上げて首が痛くなるほどだ。再び、尾根は直角に北東へと向かうが、尾根は細くなってくる分、



ブナは細くなってくる。さらに高度を

コースタイム：登山口(20分) 尾根ブナの始まり(1時間) 山頂

### 86) 白髪(しらひげ)山 1294m

船形連峰は多くの登山コースがあるが、実際に登山道周辺でブナ林が見られるのは、宮城県の大滝キャンプ場周辺のみだろうか。船形山周辺は人の手が入っているからだろう。山形側の柳沢小屋を過ぎて、さらに林道終点まで向かうと船形山への登山口となる。11月に入って間もなく、船形山頂目標ではなく白髪山から寒風山を経て関山峠までの縦走である。

登山口から入って間もなく、大きなブナが現れて驚かされた。このブナ、300年は経っている魑魅魍魎ブナと呼んでいい。何とも怪しげにしてキッカイな太さと枝ぶりと大きなウロ(洞)。アガリコだろうが、実に面白い。この先にも、端正なブナから枯れる寸前のブナ、若いブナなどが楽しめた。白髪山への登りに差掛かると、船形山が霧氷に輝いており、皆でしばし見入る。山頂からの展望を味わい、縦走路を寒風山へと向かった。(実際には、私だけ車を関山峠に廻すために、来た道に戻るのでした)この先の縦走路には目ぼしいブナ林は無いのでした。

コースタイム：登山口(1時間) 白髪山(50分) 寒風山(1時間10分) 関山峠



(写真左) 個性豊かなブナが点在する徳網山

(写真右) 白髪山登山口にある魑魅魍魎ブナ

## ハナイカダ (*Helwingia japonica* var. *japonica* ハナイカダ科ハナイカダ属)

クリーコナラ林からミズナラ林に植生する落葉広葉樹。樹の生態はアブラチャン等と同様で、叢状に樹が分岐し、林縁や沢沿いに植生する。雌雄異株。以前はミズキ科に分類されていたがDNA分析に基づく新しいAPG植物分類体系ではハナイカダ科として分離独立した。

葉は互生。葉の形は整った楕円形で先端は尾状に尖る。葉の縁は浅い鋸歯があり、その先端にはノギのような腺をつける。主脈は葉の中央部までは太く、中央から先は他の葉脈と同様の太さに戻る。葉柄は紫を帯び、天空側は窪む。葉の両面とも無毛で、葉の表側は光沢がある。



花は、腋性。花柄が葉の主脈と合着し、葉の中央部に花柄を 2、3mm 立ち上げその先に花を着生するため葉から、直接花が咲いているように見える。花卉は無く、ガクと生殖器官のみである。雌株は 1 輪の雌花を着け、ガクは緑黄色で 4 弁、雌しべの柱頭先端は 3、4 裂する。雄株は雄花を数個着生し、ガク片と雄しべは通常 3 数性を示す。

本格的に花の写真撮影を始めてから 3 年が経過した 1998 年の GW 明けに、豊富な植生を持つ一帯として注目していた森を訪れた。撮影対象がカエデの花から、スマレに移り始めていた頃であったが、スマレの花の季節は終わり、春の林床や木々の花は、既に山登りを始めていた。その日は雨上がりで新緑がいつも以上に鮮やかな姿を見せていた。林縁の新緑を眺めながら散策していた私の眼にカキのヘタのようなものを真ん中に乗つけた葉が飛び込んできた。ハナイカダとの初対面であった。そのハナイカダは雌株で柱頭とガクが丁度見頃の一輪を葉に浮かべていた。その後、毎年その森を訪問しているが、それからはハナイカダには出会ったことがない。別の山域では、ハナイカダの雄株の群落に度々遭遇しているが、雌花を見たのはいまだに、その時だけである。まさに一期一会の花との出会いであった。「ヨメノナミダ」と言う別名がある。これはその昔、殿様から葉に実のなる木を探すよう命じられた嫁が、いくら探しても見つからず、流した一滴の涙が葉の真ん中に落ちて真珠の様に輝いたと言う故事が由来と言う。今年は、ハナイカダの雌花を見つけに出かけてみよう。嫁の苦勞を味わうのも悪くはない。

## アカシデ (*Carpinus laxiflora* カバノキ科クマシデ属)

クリーコナラ林の丘陵や日当たりのよい沢筋に生える落葉高木。植生域は同属のクマシデ、イヌシデと重なり、混生する場合も見られるが、乾燥に対する順応性はクマシデ、アカシデ、イヌシデの順に高いようで、沢からの植生域はイヌシデが尾根沿いに多く、クマシデは沢筋を好む。アカシデはその中間の性質を持つ。またイヌシデは大木になるのに対し、アカシデは大木になることは少ない。樹皮、1 年生枝、葉柄、冬芽、花の苞が赤味を帯びる。秋の葉もアカシデは紅葉で、クマシデは黄葉である。



葉は互生し、葉形は卵形で先は尖り縁に重鋸歯がある。葉身基部は、通常、窪まない。葉脈は 9~15 対。葉はクマシデより葉身が短く、クマシデより小さい。新葉は赤味を呈する。イヌシデの葉は毛が多いが、アカシデは少ない。

花は雌雄異花、雌雄同株である。穂状花序で葉の展開する前に花を咲かせる。がくや花びらに当たる花皮片は無い。開花期は同じ仲間のイヌシデより早い。雄花序と雌花序の位置関係は雌花序が先に着く「かかあ天下」型である。雄花序は腋性で前年の葉の葉腋から垂れ下がる。小花は苞の下に 8~10 個の雄しべを持つ 1 花を着生する。雌花序は頂腋性で、雌花序を持つ冬芽は発芽すると葉と枝が現れ、その先に雌花序が着く。小花は苞の下に 1 花ずつ着生する。なお、クマシデは 1 つの苞に 2 花着生する。雌しべの柱頭は 2 つに分かれ、赤味を帯びる。また雌花の苞は長く先端は毛羽立つ。

雪解け間もない季節、吾妻・安達太良山麓ではカタクリ、イチゲ類、スマレ類などのスプリングエフェメラルが林床をにぎわす。この頃は、また、樹木の花もこれらの小さな花に負けじと美しさを競う。アカシデはその中でもクマシデ、イタヤカエデと並んで葉が出る前に樹冠全体に花を咲かせるので、遠くからでもほんのりと赤味を帯びた樹姿を見通すことができる。特に沢沿いでは、クマシデ、アカシデ、イタヤカエデが混生していることも多く、ヤナギ類の若葉も加わった風景は、吾妻・安達太良山系の隠れた絶景である。毎年、この季節がくるとこの地で生活する幸福感と新たな一步を踏み出す勇気に満たされる。

### 第133回自然観察会案内：奥土湯ブナ林観察会

日時：2014年4月29日（火）7：30～15：00

集合場所 四季の里交差点正面入口駐車場（あづま公園橋側） 集合時間 7:30 参加定員 20名

内容 奥土湯のスプリングエフェメラルと巨大ブナの植生するブナ林を散策します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、ストック（必要に応じ）

\*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円）

申し込み：4月28日（月）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

### 第134回自然観察会案内：古霊山自然林新緑観察会

日時：2014年5月25日（日）7：30～15：00

集合場所 小島の森第一駐車場 集合時間 7:30 参加定員 20名

内容 古霊山の僅かに残る自然林の新緑と奇跡的に残存する巨大ブナを訪ねます。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、ストック（必要に応じ）

\*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円）

申し込み：5月24日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

### 西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア（NF 米沢と共同：詳細は佐藤守まで）

1. 実施日：6月21日（土）6時30分～17時30分（雨天時6月23日に順延）

2. 定員：10名（山岳での行動において自己管理のできる方）

3. 内容：天狗岩～西吾妻避難小屋湿地帯（Aコース：6名）と西大巔水場周辺（Bコース：4名）の誘導ロープの設置作業を行います。

4. 集合場所・時間：13号線旧でん六跡駐車場 6時30分

5. 参加費：1000円（ゴンドラ・リフト代の1部を負担願います）

6. 申し込み：6月20日（金）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

なお、NF 米沢との協議により実施日が早まる可能性もありますので、協力できる方は早めにご連絡願います

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

【編集後記】東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染が発生してからまる3年が経過した。事故直後、ドイツ政府は原子力発電をゼロとする政策を決定した。事故当事国の日本政府は、エネルギー基本計画の序文から東京電力福島第一原子力発電所事故への「深い反省」を削除し、原子力発電をベース電源として位置づけるという。加えて、トルコなどへの原発技術輸出を積極的に推進するのだという。原発立国フランスならともかく、広島、長崎以来、再三再四原子力の深刻な被害を被ったにもかかわらず、現実を直視できない日本政府の救いようのない愚かさに暗澹とする。この3年の間に、原発の安全性を保障する新技術の開発がされたという話は聞いたことがない。また放射能廃棄物処理についても同様である。にもかかわらず、現政権は「安全を確認し、慎重に・・・」と観念的な言葉遊びに終始している。まるで、3年前の事故はまぼろしでもあったかのような振舞である。事故当事県・福島の自然は、深刻な環境汚染を被った上に、「仮置き場」を確保するため森を切り開き、自然エネルギーを確保すべく山や沿岸部の開発計画が進行している。トカゲの尻尾切りのように、事故の後始末を福島で自己完結させようとしているかのようである。この国は狂っていないだろうか。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第88号 2014年4月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木